

ゆづな歳時記

登場人物



■若木ゆずな 御蔵橋に住む中学一年生の少女。ちんまりとしたおさげ髪とどんぐりまなこが特徴。早くいちにんまえの大人になりたいと願うが、そそっかしいからの失敗も多い。

■雨宮 旬 御蔵橋に引越してきた少年。おっとりとした繊細な風貌と物腰を持つ。恋多きひとである母に連れられて各地を転々として育ってきたこともあり、御蔵橋に来るまでは内向的な面を隠し持っていた。



■堤 夏生 ゆずなのクラスメイトで、豆腐屋の娘。水泳が何より好きな、ショートカットの元気少女。



■八重垣 縁里 ゆずなの中学校のクラスメイト。古風な丸眼鏡をかけており、けだるげで淡々とした言動を常とする。クラスの影のこ意見番。

■小野寺 陽子 ゆずなのクラスメイト。押し強さと行動力を持つクラスの中心人物だが、意外と足元がおろそかで、八重垣 縁里にはよく隙をつかれて防戦一方になる。



■相羽 響 ゆずなのクラスメイト。小学校まで海外に暮らしており、いささか硬い物言いと凛然とした雰囲気を持つ。接骨院と武術道場の養子。

■小川 千穂 ゆずなのクラスメイト。おっとりとした雰囲気とはうらはらのしつかり者で、個性派ぞろいの1年1組を学級委員としてまとめあげる。

■鹿島先生 ゆずなたちのクラスの担任の先生。

■正さん 御蔵橋の和菓子屋の主人。旬の叔父。

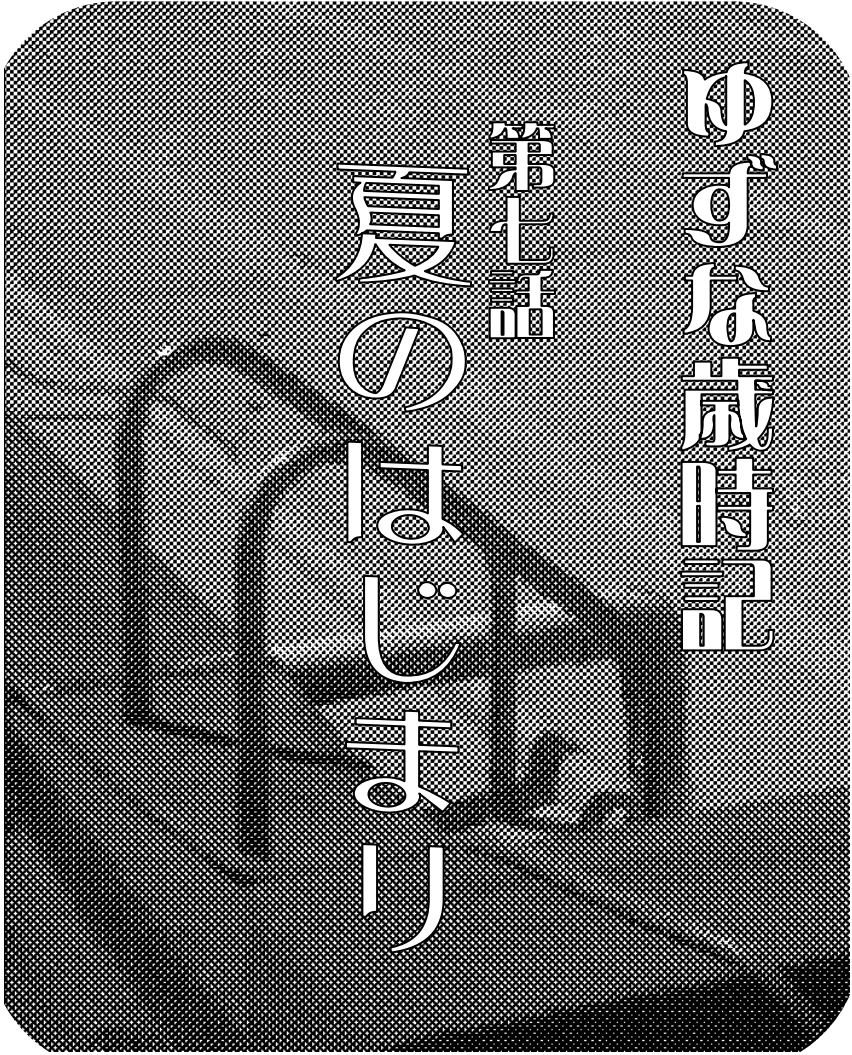
■伊沢 慎吾 ゆずなのクラスメイト。堤 夏生の幼馴染で、朴訥で真面目な性格ゆえに夏生との小さいさが多い。



ゆづな歳時記

第七話

夏の
のはじまり



夏空の下に響く、川のせせらぎの音。

しばし雲に隠れていた太陽が姿を現し、燦然さんぜんと辺りを照らしだす。

土手と河川の間を横たわる、広々とした河原。大小あまた多数の石が織りなす凸凹でこぼこも、真上から降りそそぐ陽射しに影のひとつすらなく。

その河原の水の辺ほとりに、少年は呆然と立ち尽くしていた。

小学校には上がる前とおぼしき、まだあどけない面立ち。真っ赤になつた頬にも、裸の肩にも、水の滴が流れ落ちて——少年は、頭から足の先までびしょ濡れだ。

おい、大丈夫かあ!? と、背後から大人たちの声を足音が近づいてくる。それでも少年には、振り返つて応えるゆとりはなかった。

彼はただ、涙ぐんだ目ですぐ眼前の前の水辺を見つめるだけだ。膝までの水の中をゆつくりとこちらに歩いてくる——少女の姿を。

彼女もまた、少年に負けず劣らずの濡れ鼠ねずみだった。

薄水色の子供用ワンピースは全身が水をかぶり、裾しずくから滴がしたり落ちる。短めな黒い髪も、べつたりと肌にはりついていた。

だが、しかし。

ようやく泣き止んだばかりといった少年とは違って、少女の表情は

あつけらかんとしたものだ。へへ、と笑いながら岸にあがつてくると、大きな目で少年の顔を見あげる。

「だいじょうぶ? ——しんご」

元気いっぱいな少女の問いに、少年は唇を結んだまま大きく頷く。それを見て、少女のいとけない顔にはさらに明るい笑みが咲いた。

背中その後ろに回していた腕を——ちいさな手に掴んでいたものを、彼女は少年に向けて差し出す。

「はい! しんご」

土手の木の上で遠く、ミンミンゼミが鳴いている。真夏の陽射しの下、川の水音が幼いふたりを包み込む。

心地よげに目を細めて、少女は空を仰いだ。

どこまでも高く遠く澄みわたる青の、その一番高いところ。

夏という季節そのもののように、太陽は眩い輝きを湛たえている。

◆
夏という季節そのもののように、太陽は眩い輝きを湛えている。

その、晴れ渡る陽の光の下。ざざざざざあつ……！ という勢いのいい水音が、辺りに響く。

綺麗に磨きあげられたばかりの、空色の防水フロア。縦25メートル、横12メートルの、つややかに水に濡れた長方形の床面。その中央に、空の太陽がくつきりと映し出されて。

その太陽の前——まだ水のないプールの只中に、少女はひとり佇んでいる。

男の子のように短めな髪と、くりつとした瞳が目をひく潑刺とした印象の面立ち。紺色の学校用水着を纏った身体は細めだが、汗の滴を浮かせた肌は、その内にめいっぱい凝縮された健やかさを感じさせずにいられない。

澄んだまなざしで空を仰ぎ、彼女はゆつくりと深呼吸をする。紺色の水着の内側で、つつましやかな胸が上下した。

水音は響き続けている。プールの角、給水用の鋼管から、水は滝のように流れ落ちる。

勢いよくフロアを叩く、その水音を聞きながら。

少女は——御蔵橋中学校一年一組、堤夏生は、空のプールの床に両膝をついた。

動きは、あくまでも静かに。しかし、よく目にすれば判るだろう。

しなやかな腕の先、握り締めた両の拳が細かに震えているのを。神妙に引き結ばれた唇が、こみあがる笑みを懸命にこらえるように弧を描いているのを。

プールの角から、水の版図が広がってくる。強い陽射しに早くも乾きつつある空色の床を、再び清らかな水が濡らしてゆく。

不規則に伸びる水流の腕のひとつが、ほどなくしてプールの中央に差し掛かり——堤夏生の両膝の間を潜り抜けた。

「——くう——うっ——」

脚を濡らす冷たい水に、夏生は心地よさげに目を細める。

両手をつけて四つんばいの姿勢になると、そのままひとおもいに、まだ浅い水面に彼女は倒れこんだ。

たはんつ、という、胸とお腹が水を叩く音。飛沫が陽にきらめき、染みこむ水は腹ばいになった夏生の水着を、ひとときわ深い紺色に染めていく。

「はあ——」

いまにもそのままろけてしまいそうな表情で、夏生はプールの床にびとりと片頬を寄せた。両手両脚は水をかき抱かんばかり、四方にまっすぐ伸ばされて。

いとおしげな息をつくくと、夏生は寝返りをうつ。身体を濡らす水を待ちきれないように、伸びやかな大の字になってプールの底に背中をつけた。

まなざしに、空の太陽が映る。

七月の頭、梅雨が明けるのはまだもう少し先。

けれども、この月曜日の放課後。清掃を終えたプールの中で、堤夏生にはひと足早く夏の盛りが訪れる。

心地よく投げだした四肢にいまひとたび力をこめ、夏生は大きく息を吸う。小麦色というにはまだすこし淡い日焼けの頬を、汗と水の滴が滑り落ちていく。

涼しげな給水の水音。プールの周りの樹々に、いささか気が早く鳴きはじめてた蝉せみの声。その音に負けないくらいに、

「いゃっほ——うっ!!」

堤夏生は思い切りのびをして、空に届けとばかりの声をはりあげ

た。

「……お医者さまをお呼びしたほうがよろしいでしょうか？」

見学席の屋根の下、八重垣やえがき縁里ゆかりは静かに愛用の丸眼鏡を正した。

プールサイドを渡る夏風が、髪を束ねた白のリボンを揺らす。長時間の陽射しには弱い縁里なので、今日のプール清掃は制服姿のままで監督役だ。

「案ずることはないだろう」

脇に佇む、こちらは水着姿の相羽あいば響ひびきが腕を組んで頷いた。凜とした顔に浮かぶ表情は、いつもながらにごくごく真面目なまま。

「ここ数年を見ている限りでは、最初に水に入るときの夏生なつおはいつもあのようになっていると思う」

「そうですか。それならばいいのですが」

いつもながらの淡々とした声で、縁里が応える。

冗談を言うときも表情が変化しない縁里と、冗談という概念があまり頭の中に存在しない響。二人のやりとりはなにやらこの場にそ

ぐわぬ、由々しき雰囲気で。

そんな会話の声をよそに、目の前の25メートルプールの中からは、

——ははっ——ひゃ！ あははははははは！

突き抜けるような笑い声と、ぱん！ ぱあん！ と水を叩く音とが、いつ果てるともなく聞こえてくる。

空色の、まだ数センチの水しかないプールの床を、紺色の水着を纏まとつた夏生が歓声を上げながら跳ね転がる。きらめく水しぶきの中で踊るすらりと細い身体は、溪流の浅瀬をゆく若魚わかうおのよう。

「……あれはもう、しばらく放っておくしかないわよねえ」

「う——うん」

隣の小野寺陽子の声に、若木ゆずなは神妙に頷いた。もしも放っておくなどいわれても、いまのあの夏生ちゃんを止めたりなんだりすることはできないだろう。

両手で持ったデッキブラシを杖のようにして、ゆずなと陽子はへたり込みそうな身体を支える。

いまのいままでプールとプールサイドをひたすら磨き続けて、ふたりともかなりへとへとなのだ。まだ水に入ってもいけないのに、水着の色が変わるくらい汗が滲んでいる。

同じように、というか、ゆずなたちの二倍くらいの活発さで働き続

けてなおあの元気が残っている夏生のほうが、どう考えても尋常ではないのだった。

けれども、まあ。

——うれしそうだなあ……夏生ちゃん。

溜めこんだエネルギーを爆発させるように水にはしゃぐクラスメイトを見ると、なんだかこちらまで、元気とよろこびが満ちてくるような気がする。ここ数日の、ちよつと挙動不審なまでにそわそわした彼女を見ているだけに、ひとしおに。

月曜日。期末テストの返却期間のために午前中四時限で授業が終わった今日、水泳部の夏生のプール掃除をいつもの面々で手伝って。

——最初はやはり、夏生から水に入るべきだと思っ。

相羽響のそんな提案もあり、いまはちよつど磨き終えたプールに水が入るのを待ちがてら、ほかのみんなはプールサイドで休憩をしているところなのだった。

夏生のほかに、ゆずなと、響、陽子、縁里、そして男の子ふたり。

男子ふたりは、プール掃除が終わったことの報告のために職員室に行っているところだ。夏生ちゃんにつきあう形で、できたての水泳部

に籍をおいている慎吾しんごくん——それから。

「ゆずな、ねえ、ゆずな！」

隣の陽子に、ゆずなは突然指で頬をつつかれた。

「それにしても、さっきから見たら——ダメじゃない！ もうちよつと、雨宮あまみやくんあまみやに積極的にアピールしなくっちゃ」

「——へ？」

あまりにも唐突な話の切り出しかたに、ゆずなはばちくりとどんぐりまなこをしばたかせる。

どうして急に雨宮くんの名前が——あぴーる、つて？

「夏よ。夏なのよ！ 夏が来るのよ！」

呆然とするゆずなをよそに、陽子はデッキブラシを放り投げると、空の太陽に向かつて高く腕をさし上げた。

「夏といえば、あれじゃない。水着とか、夏祭りとか、花火とか肝試しとか。恋するふたりがいつきに距離を詰めるのにもつてこいの季節！ 浴衣とか水着とか、男の子をドキドキさせちゃう格好をするチャンスももりだくさんの時期なんだわ。

——それなのに！

「ひゃん！」

ゆずなは思わずすつとんきような声をあげた。伸ばされた陽子の指が、水着の胸元をつまんでひっぱったからだ。

「そもそも何よこの小学生まるだしな水着姿は」

陽子あまみやのその言葉に反応もできず、ゆずなは真つ赤になって口をぱくぱくさせる。

そういう陽子ちゃんも、他のみんなも水着は女子共通の学校指定水着なのではあるけれど。陽子ちゃんが言っているのは、彼女の指がつまんでいる部分。胸元に縫い付けられた『11 若木』の名前の布のことなのだ。

ついでこの間、中学校で使う新しい水着を買って。よく考えずに名前の札を取り付けてしまったのだれど——小学校の時とは違って、胸に名札の布を貼るきまりは特にないとのこと。今日になって気づいてみたら、水着に名前の布がついているのはゆずなひとりのみだったのである。

いろいろ育ちかたの足りない身体もあいまつて、背が高めな陽子ちゃんや響ちゃんといっしょだと、確かに自分ひとりが小学校から迷い込んできたみたいだ。

「だ、だつてっ！」

「だつてもあきつてもないわよ！」

あやふやに洩らした反論の声は、陽子に力でねじ伏せられる。

「いい？ ゆずな。最初が肝心なのよ？ 今年のこの夏にどれだけ雨宮くんをひきつけておけるかが、今後の恋の展望を左右するのよ。聞いているの？ ゆずな！」

「わああ！ ひ、ひつぱちやだめええ！ 水着！ 伸びちやう脱げちやうー！」

「まったく！ こうなったら私が、じきじきにコーチして仕込んであげるわ。まずはこう、雨宮くんが戻ってくるのにあわせて微妙に水着の肩をはだ」

と。陽子の声は、唐突にそこで断ち切られた。水着の胸をつまんでいた指が離れ、ゆずなはひゃ!? と悲鳴をあげて後ろによろめく。

陽子ちゃんの身体を後ろから、二本の腕がしっかりと羽交い絞めにしている。

「ちよ、ちよつと！ なにすんの上響！ いま私は、ゆずなど大事な話が——」

「——夏生さん」

陽子の言葉を遮って、プールサイドに静かに響いたのは縁里の声。

「もうそろそろ、プールにお邪魔してもよろしいでしょうか？」

「あ！ ごめん！ いいよいいよー！ 響とかも、入ってきて！」

プールの中から、夏生の元気な声が答える。

「だ、そうです」

丸眼鏡の奥の目を静かに細めて、八重垣縁里は見やる。かたわらの響と、その響の腕に抱きすくめられて硬直した陽子を。

「陽子さんはいささか日光に頭をやられていらつしやるご様子です。すこし冷やしてさしあげるとよろしいかと」

真面目な顔でこくりと頷き、響はプールのほうに歩き始める。

「待った！ 待ちなさいよあんたたちーっ！ 私は普通ですつてば！ 放しなさい響っ！ こらーっ！」

声をあげて暴れる陽子だが、身体は響の腕に後ろから抱き上げられており、浮いた足をいくらばたつかせてもまったく埒があかない。

響はひとたび、いいのだろうか？ という表情でこちらを振り返ったが……縁里が応えて頷くと、そのまま陽子を運んで歩み去っていく。

ほどなくして、きやあああああ！ という裏返った悲鳴と派手な水音がプールに響きわたった。